

〈巻頭言〉

書の香り

真宗総合学術センター長・教授 乾 源 俊 (中国文学)

巻頭言を依頼されて、何かテーマがあるのか訊いたところ、特にないのとの答えであった。しばらく考えて、結局、表題のようなこととした。

自分にとって書の香りとは？ とあらためて問うてみて、思いあたるのは新たに教科書を買ったとき辞書を購入したきのことであろうか。いわば獲得すべき知識への期待が、工業製品としての本に、紙そのものというよりは製造過程で付着した、それが何かは知らないが、ある化学物質の匂いにまわりついて記憶となっている。そしてそれら書籍が使いこまれ、知識が獲得されるとともに、手触りとなって、手の記憶へと変化する。

古人の場合はどうだったであろうか？ 線装本の時代、書といえば和紙と墨の匂いであろうが、いずれにしてもそれは当時の技術が製品として本に集約され、匂いとなってあらわれたものであったろう。それがやはりエクリチュールの快楽にまわりついて記憶をなしていたであろうか。簡策の時代になるともう想像することもむずかしい。防腐のため竹を炙ったというがそれはどんな匂いか。それはともかく書籍はたいへんな長物で簡単に携行できるようなものでなかった。漢の朱買臣は生活のため薪を拾いながら道みち書を「誦した」というが、そらんじるよりほかなかった。読んでいたら、薪どころか、竹筒を背負わねばなるまい。劉歆は楊雄の『太玄経』の価値をだれも理解せず、漬物の瓶の覆いにされるのがおちだと言ったというが、これも書籍の長大さ重さが話のもとにある。

閑話休題。いまや『四庫全書』が iPod に収まる時代である。それだけでなく、文庫本にしても紙面がつるつとしてきれいである。つまりここ二十年ほどの間に電子写植となり活字本が消えた。活字本など見つけると思わず手で紙面をさすってしまう。それはともかく、この技術革新は自分の仕事や生活全般にまで影響が及ぶもので、書物とのかかわりも「検索する」ことが主になっている。書から匂いが失せ、手触りが消えたと思うのは、嗅覚の衰えや知識欲の低下ばかりでなく、こうしたかかわり方にも原因があるのであろう。

ここまで書いてきて、特に話の落としどころがあるわけではない。とりあえず、来るべき書物の香りとはどのようなものか？ としておこうか。さて、みなさんにとって書物はどんな匂いがしていますか？